

それは八年前のこと、ある少女が鳴海孝之に言った。

『どっちかを選ぶ。それは自分をどうにかする代わりに相手をどうにも出来なくすること。同時に相手の希望も叶えてやろうなんてお笑いぐさだ』と。その通りだ。選択すればなにかを手にし、なにかを失う。彼も彼女たちも、形は違えど必ず痛みを負う。

涼宮遙は言った。

『水月と付き合っけていても友達で居て欲しい』と。それは彼女の本心とはかけ離れていた。彼女は彼と共に歩む道を望んでいた。

速瀬水月は言った。

『好きにしている、なんでもする、負担にならないようにするからそばにいさせて欲しい』と。それも彼女の本心とはかけ離れていた。今にも壊れそうな精神状態にぎりぎり折り合いをつけ、ようやく絞り出した言葉だった。

彼は選べた。遙を選ぶことも水月を選ぶことも、そして全てから逃げ出すことも、孝之にだけは幾つもの選択肢があった。

そして孝之は選ぶ。

『遙、愛してる』と。彼女に初めて伝える言葉で、彼は遙と共に歩いて行くを決めた。

しかし一方で忘れられず失いたくない想い、いや独占欲がもたらしたものの。彼の選択、いや選択などではなくただ流されただけ。その結果彼が手にしたのは、遙を愛しつつも同時に水月を欲望のはけ口とする生活だった。

LES BONHEUR DE LA IMMORALITÉ

君が望む永遠 二次創作小説
背徳の快樂

有栖山葡萄

二にして一、一にして二、かくのごとく相抱いて水に投ず、死する
るとき楽境にあるがごとく、濁水もまた甘露を味わうに似たり。
万事かくして了れば残るものは、はしたなき世の浮名のみ。浮き
名とはなんぞや、ああ美なり……。

「桂川」(吊歌)を評して情死に及ぶ

著／北村透谷

彼の腕枕で静かに横になっていることに飽きたのか、女はもぞもぞと身体を動かし男に抱きつく指を胸元に這わ始めた。

「はるか、どうしたんだ」

男が落ち着きのない彼女に声をかける。

「ねえ鳴海さん。あのね、もう一回したいなあって」

彼女は上目遣いに男を見ると、大学生だという歳に似合わず

妖艶な笑みを浮かべた。

「時間は大丈夫だけど、これから仕事だぞ」

壁に掛けられた時計をちらりと見る。

「まだまだ元気だもん。それにそんな事考えて、楽しみを先送りにするなんてもつたないよ」

「それもそうか」

彼女の言い分はもつともだ。

「それに、私達ってこれのために付き合ってるんでしょ」

彼の胸を這う彼女の指先がゆっくりとお腹へと動いていく。

「はは、ほんとははるかは判りやすくして良いよ」

鳴海は腕枕をした手で彼女の髪を梳き耳元をいじる。

彼女の言うとおりで、二人は肌を重ねることを目的にだけ付き合っていた。

「だってそういうのだけが欲しいんでしょ」

はるかは彼のヘソの辺りで指先の動きを止め、じらして鳴海の反応を見ている。

セックスフレンドなどと言えはなんとなくリア充っぽいのが、所詮は性欲のはけ口だ。普通ならそんな関係はいやがるだろうに、彼女は逆にそれを望んでいた。

「まあな」

彼としても都合の良い相手であったし、身体の相性も悪くなかった。いざさか積極的すぎるくらいはあったが、それは今の関係では別段悪いことではなかった。

「浮気なんて後腐れない方が楽しいに決まってる、もうゴタゴタはごめん」

彼は吐き捨てるわけでもなく、ただ事実そうだと淡々と口にした。

「奥さんは相変わらずですか」

「薄々は感づいてるみたいだけど、なんにも言ってこないよ」

「そんなので、よく続いていますね」

孝之は無言で考え込む。

「なんでだろうな」

考えたけれどそれは判らなかつた。

鳴海自身にとって家庭はどうでもいい存在になっていたのに、妻はいつまでもしがみついていた。それは彼にとっても離婚だなんだの煩わしさと世間体を考えるとありがたい話であつたが、それにしても不可解ではあつた。

それにもう一つ、鳴海には不可解なことがあつた。

「前から聞こうと思つてたんだが」

「どうかしました」

彼女は上身を少し起こし、なにを聞かれるのかと不思議そうな顔をして鳴海の顔をのぞき込んだ。

「よく聞いてくるよな、水月のこと」

はるかは彼の妻を話題にすることがしばしばあつた。最初はただの好奇心かと思つていたが、それにしては付き合つてしばらく経つた今でもそれは続いている。

「ダメですか」

「いやダメって事はないが、どうしてなのかと思つてな」

彼自身そんなに女性経験が豊富というわけではないが、自分なら相手の男の話なんて聞きたくもないと、彼女の心理が判らなかつた。

「それはですねえ」

はるかはいつた言葉で区切り、言いたいことを整理しているようだった。

「鳴海さんの奥さん浮気されて可哀想だな、わたしって悪いことしてるんだなって。そう考えると全身が痺れるくらいに気持ち良くなるんです」

「……、悪趣味だな」

予想外の言葉に鳴海は一瞬言葉を失い、そのまま本音を漏らした。彼もまさか妻の存在を興奮剤にしているとは思ひもしなかつた。

「そんな言い方酷いですよお。ほら真夜中に太っちゃうかなあなんて思いながら、でも欲望のままに食べちゃうインスタントラーメンがやたら美味しく感じるの、あれと同じですよ。それじゃあ、こうやって浮気してる鳴海さんはどうなるんですか」

「む、まあ最低だな」

そこをつかれると反論のしようがない。自分のやつていることに罪悪感なんでものはとうに感じなくなつていたが、それでも最低のことはしていることくらいは判つている。

「悪趣味な情婦と最低の浮気男、相性いいかも」

「バカいつてんじゃねえよ」

鳴海は彼女の髪に絡ませていた手をくしゃりと乱暴に動かす。「で、お嬢様は今欲情していらつしやると」

「正解。ということ」

鳴海の言葉に満足したのか、彼女の指が下腹部を一気に滑りおり彼のペニスを優しく握つた。



「この子に早く元気になってもらって、もうひとがんばりしてもらわなきゃ」

親指を鈴口に当て残りの指と手のひらで包み込むと、ゆつくりとした動きで刺激していく。

彼の分身はそれに反応して、徐々に硬さを取り戻していく。

「しかし三回目か、大丈夫かな」

自分の身体のことだ、反応が鈍くなってきていることに気づいていた。

「鳴海さん、おじさんくさいよ」

「おじ……」

初めての言葉に彼は絶句する。

「三回くらい平気だったじゃない」

「うっさい、もう来年は三十路なんだよ。そんなに言うなら足腰立たなくしてやる」

「その言い方もなんか、きやっ」

孝之は彼女を仰向けに押し倒すと、その後の言葉を言えないように無理矢理口づけし舌をねじ込んだ。

その強引な行為が引き金となり、彼女の手の中で彼の昂ぶりは一気に増した。

「きやはっ、鳴海さんはこうでなくっちゃ」

はるか満ちた言葉に孝之は嗜虐的な笑顔で応え、彼女の身体を勢いのままに貪っていた。



結局二人は時間ぎりぎりまで部屋で身体を絡ませ、手短にシャワーを浴び支度を調えると鳴海とのの車で職場へと向かった。

「どうします、私途中で降りた方が良いですか」

「時間もぎりぎりだし、このまま乗っていけ」

鳴海がダッシュボードの時計をちらりと見てから言った。

「見られたらまずくないですか」

「まあそのときは近くで拾ったとでも適当にごまかせばいい」

「鳴海さんって結構そういうところ大胆ですよ」

「なるようにしかならないさ」

本人もそれが危ないことと判っているが、下手に遅刻させるよりはまだましだと思っただけのことだ。

鳴海は店につくと駐車場一番奥に車を止め、彼女と一緒に裏口から建物に入り事務所に向かった。

「おはようございます、鳴海店長」

「おはよう、宮代さん」

「おはよう、宮代さん」

鳴海が挨拶をする。

「あれ、はるかちゃんと一緒だったんですか？」

宮代と呼ばれた女性は、二人に向かってそう聞いてきた。

「ああ銀行に寄ったら偶然ね」

鳴海は別に宮代に言い訳をする必要はないのに、なぜか言葉を詰まらせてしまった。鳴海は彼女のこういった所がめんどくさくなり、数ヶ月前に別れたのだった。

「大丈夫ですよ、私以外は気がついてないみたいですから。それにしてももう少し巧くやっただ方が良いですよ、鳴海店長。これは元愛人からのお節介な忠告です」

「ふんっ」

「じゃあホールに戻りますね」

くすくすと笑いながら彼女が立ち去っていく。

改めて自分の匂いを確かめたが石鹸の匂いなどしないし、考えてみればさつき使っていたホテルは無香料の物を置いていた。そこで初めて自分がかまをかけられていたことに気がつく。

「ったく、人が悪い」

鳴海がこぼす。

「でもまあ、用心に越したことはないか」

確かに店の子に手を出しているのを周囲に知られるのはまずい。もう少し用心した方が良い事は確かだった。

そこまで考えると鳴海は事務所に入り、ユニフォームに着替える。

「今日はちょっと立ち仕事は控えめにしたいな」

腰をさすりながらそう呟いて、鳴海は今日の仕事に取りかか

った。

「認めるものにも……」

「瞬間を強ばらせてしまう」

「ふふ、そんなにうるたえたら認めてるようなもんですよ」

「認めるものにも……」